一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程
鈴木　良和

ジョン・ポール・A・ゴブリアル「導入部 ― ミクロヒストリーの歴史家のように世界を見る」

John-Paul A. Ghobrial, “Introduction: Seeing the World like a Microhistorian”, *Past & Present*, 242, Issue Supplement 14, 2019, pp. 1–22.

紹介

同論考は、2019 年の『過去と現在』誌特集号「グローバルヒストリーとミクロヒストリー」のイントロダクションである。グローバルヒストリーが抱えている問題をわかりやすく提示するとともに、そうした問題を解決するためにグローバルヒストリーとミクロヒストリーを接続する近年の議論の動向を整理している。

〇グローバルヒストリー興隆以前の状況

・2006 年にパトリック・オブライエンは『グローバルヒストリー誌』創刊号において、グローバルヒストリーの「新しい」(modern)形態を復活させるよう呼び掛けた[1]。それからわずか 1 年後に、ドミニク・サクセンマイアーがこの提言に対して疑問を提示した。グローバルヒストリーはオブライエンにより描かれたような「エキュメニカルな歴史」に本当になりうるのだろうか[2]。

・ロジェ・シャルティエもまた『アナール』2000 年 5 月号に重要な問題を提起していた。「世界を考えるとして、だれがそれを考えるのか。過去の人間か、それとも現在の歴史家か」。アナールの編集者たちにとって一つ確かだったのは、そうしたグローバルヒストリーを書くことが「かなり困難なものになるだろうということである」[3]。

➡今となってはこうした声が存在したことを思い出すのは難しい。それほどまでグローバルヒストリーは過去 10 年間に西洋史において確固とした地位を築いてきた。

〇グローバルヒストリーの隆盛

・すでにグローバルヒストリーの多くの成果が単著や論集として出版されている[4]。

---

[1] Patrick O’Brien, “Historiographical Traditions and Modern Imperatives for the Restoration of Global History”, *Journal of Global History*, 1, 2006, p. 3 (abstract).

[2] Dominic Sachsenmaier, “World History as Ecumenical History?”, *Journal of World History*, 18-4, 2007.

[3] Roger Chartier, “La conscience de la globalité (commentaire)”, *Annales: Histoire, Sciences Sociales*, 56-1, 2001.

[4] 例えば、全 7 巻の *Cambridge World History* や、ハーバード大学から出版された全 6 巻の *A History of the World*、フランスでは Patrick Boucheron (ed.), *Histoire mondiale de la France*, Paris,

・2012 年にディヴィッド・アーミテイジは「ナショナルヒストリーのヘゲモニーは終わった」と宣言した。アーミテイジによれば「もしあなたがはっきりとトランスナショナル、インターナショナル、もしくはグローバルな研究をしていないのであれば、「なぜ」そうしないのかを説明する必要がある」[5]。

・2016 年にロバート・ムーアはさらに一歩進み、グローバルヒストリーの興隆は 20 世紀後半にそれに代わり得るパラダイムがすべて崩壊してしまったことの自然の成り行きであると説明した[6]。

○グローバルヒストリーの問題点も再び指摘されるように

・ゼバスティアン・コンラート『グローバルヒストリーとは何か』が現在もっとも徹底したグローバルヒストリーについての考察。コンラートによれば「研究上のすべての問いが、グローバルなアプローチを必要とするわけではない。グローバルな文脈がいつでも中心であるということでもない。なんでもかんでもが、他のなんでもかんでもとつながり、接続しているわけではないのだ。グローバル・ヒストリーを唯一有効なアプローチ――歴史叙述の視点として、あるいはそれが探求しようとする絡み合いの範囲や密度において――であると見なすのは、間違いなく誤りだろう」[7]。

・2016 年にユルゲン・オスターハンメルは、グローバルヒストリーに理論的枠組みが乏しいことを危惧している[8]。

・グローバルヒストリーを支えている柱が批判の重みによって崩れ始めていると感じている歴史家もいる。

・2013 年にディビッド・ベルは、グローバル・ターンが衰退期に達したのではないかと指摘した[9]。

・エレミー・アデルマンは、今や「グローバルヒストリーはほとんどすべての人を包含

2017、イタリアでは Andrea Giardina, *Storia mondiale dell'Italia*, Bari, 2017、オランダでは Karel Davids et al. (eds.), *Wereldgeschiedenis van Nederland*, Amsterdam, 2018. 〔なお、これらの論集のうちフランスで出版されたパトリック・ブシュロン編『世界の中のフランス史』については、岩波書店の『思想』(1163 号)2021 年 3 月に特集が組まれている〕。

[5] Martine van Ittersum and Jaap Jacobs, "Are We All Global Historians Now? An Interview with David Armitage", *Itinerario*, 34-2, 2012.

[6] Robert Moore, 'A Global Middle Ages?', in James Belich et al. (eds.), *The Prospect of Global History*, Oxford, 2016, p. 85.

[7] Sebastian Conrad, *What is Global History?*, Princeton, 2016〔小田原琳訳『グローバル・ヒストリー：批判的歴史叙述のために』岩波書店、2021 年〕。引用は邦訳 16 頁より。

[8] Jürgen Osterhammel, "Global History and Historical Sociology", in James Belich et al. (eds.), *Prospect of Global History*, 38, 2016.

[9] David Bell, "This is What Happens When Historians Overuse the Idea of the Network: Review of Emily Rosenberg (ed.), *A World Connecting: 1870–1945,* Harvard, 2012", *New Republic*, 26, 2013.

している。そのために、グローバルヒストリーは無意味なものになってしまうほどにまで肥大化している」と懸念を表明した[10]。

➡こうした懸念は新しいものではなかった。グローバルヒストリーの歴史家たちは今でも、グローバルヒストリーとは何なのか、それは何の役に立つのか、それは誰のためのものなのか、という問いへの答えを見つけ出そうとしている。

1.「焦点を合わせる」（COMING INTO FOCUS, pp. 5-10）

〇グローバルヒストリーの諸分野

・グローバルヒストリーは危機に陥っているわけではないが、様々な種類があり同じ家族で争い合っているような状態にある。

・グローバルヒストリーの正式なメンバー

➡「ワールドヒストリー」、「トランスナショナルヒストリー」、「接続された歴史」、「交差する歴史」、「インターナショナルヒストリー」

・グローバルヒストリーの陰であまり居心地がよくなさそうな支流。

➡「復興された帝国史」、「脱構築されたエリアスタディーズ」、「文献学」「ローカルヒストリー」「ナショナルヒストリー」

〇グローバルヒストリーが抱える問題

①場所に根差した研究の運命（the fate of place-based research）

・グローバルヒストリーは「接続」、「循環」、「統合」を強調する分野であるため、場所に根差した知識や専門的な知識が軽視されているという懸念が存在する。

・グローバルヒストリーは接続しているものの重要性を過大視し、接続されているものの重要性（例えば、社会内部のダイナミクス）を軽視する危険がある。

・グローバルヒストリーの歴史家には、彼らの研究対象である世界に住む研究者や「現実の人々」とどのように関わるべきなのかという大きな問題が生じている。

②変化を説明することができるか（the ability to explain change）

・グローバルヒストリーは「循環」や「接続」について理解する上では役に立つが、時間的な変化について説明するにはあまり役立っていない。さらに重要なのが、互いに接続された場所においてなぜ変化が異なる仕方で生じるのかを明らかにできていないこと。

・フランス革命を例に取れば、グローバルヒストリーはフランス革命が世界中の様々

[10] Jeremy Adelman, “Replies to Richard Drayton and David Motadel”, in Richard Drayton and David Motadel, “Discussion: The Futures of Global History”, *Journal of Global History*, 13, 2018, p. 19.

な場所に広がっていく仕方を理解するには役立つが、なぜ、またどのように 18 世紀に特定の仕方で諸革命が展開したのか、またそれらがなぜ異なる仕方で展開したのかを説明していない。

・グローバルヒストリーは、グローバルスケールのフローや移動を優先することで変化の過程や文脈を無視してしまう危険がある。

③史料や理論的枠組みとの関係（its relationship to sources and theoretical frameworks）

・グローバルヒストリーの内部で仕事をする歴史家は非常に多様であるために、史料、理論的枠組み、社会科学をはじめとする他分野との関係についてどのような態度を取るかは一様でない。

・そのためグローバルヒストリーは、ミクロヒストリーからビッグヒストリー、ディープヒストリーにまで及ぶ、タイプのまったく異なる歴史研究を包括するなんでもありのフレーズになってしまう危険がますます大きくなってきている。

・グローバルヒストリーを二次文献に基づいて大きなスケールでの統合を描き出すフォーラムと見なす歴史家もいれば、グローバルヒストリーは文献学やローカルな文脈、とりわけ一次史料とのつながりを維持しなければならないと主張する歴史家もいる。

・統一されていることが望ましいというわけではないが、それでも次のような問いは残されている。グローバルヒストリーは部屋がたくさんある家なのか、それともバベルの塔なのか。

④ヨーロッパ中心主義の記録（its record on Eurocentrism）

・グローバルヒストリーはヨーロッパ中心主義に対抗することができたのだろうか。

・欧米以外の歴史家が、欧米で行われているグローバルに関する議論に関心を持っているのかよくわからない。

・グローバルヒストリーが欧米以外の歴史家にあまり注目されていないとしても驚くべきことではない。自分の住んでいる都市がグローバルフローのただの中継地点に還元されてしまう歴史などだれが望むというのか。

・グローバルヒストリーは本当にグローバルになることができるのか。

２．ミクロヒストリーとグローバルヒストリーを接続する（CONNECTING MICROHISTORY AND GLOBAL HISTORY, pp. 10-17）

〇ミクロヒストリーが役に立つ

・ミクロヒストリーはグローバルヒストリーが抱える課題に取り組む上で役に立つ。

・このことは近年の研究においても指摘されているが、ミクロヒストリーの役割が具体

的にどのようなものであるのか、実践の上でグローバルヒストリーとミクロヒストリーをどのようにつなげるのかという点についてはあまり説明されていない。

○ミクロヒストリーについて

・ミクロヒストリーにはマクロやグローバルヒストリーとの関係について考察してきた長く実り豊かな蓄積がある。

・ミクロヒストリーの形態は各国においてさまざまであり、個と全体をどのように関連させるのかという考え方にも違いがある。

・この違いはイタリアとフランスにおいて特に顕著。

①フランスのミクロヒストリー

・フランスのミクロヒストリーはフェルナン・ブローデルやアナール学派の「全体史」にまでさかのぼる系譜を持つ。真の全体史（genuine total history）を追求するために、ブローデルの弟子たちは州や村へと焦点を小さくしていった[11]。

・フランスのミクロヒストリーの歴史家にとって、一つのミクロコスモスは全体史へと通じる窓、つまり砂粒の中に世界を見る機会をもたらしてくれる。ローカルな研究によって命を吹き込まれたミクロコスモスは、まさに時代全体の似姿になっていると想像されることになる。

➡このような方法は逆説的に大きな物語に貢献することになった。

②イタリアのミクロストリア

・1980 年代のイタリアでカルロ・ギンズブルグ、エドアルド・グレンディ、ジョヴァンニ・レヴィといった研究者の作品に登場したミクロストリアは、フランスのミクロヒストリーとはかなり異なっている。

・イタリアにおいて、ミクロストリアは一次史料に取り組む特定の実践や形態と結びついていた。

・彼らは分析の焦点を縮小し、まるで顕微鏡を眺めるように史料を読み、細部や徴候を重視した。彼らがこうした方法を用いたのは、大きな物語が有する目的論や勝利主義(triumphalism)を崩すためであった。ミクロストリアは大きなスケールを持つパラダイムに挑戦した（マルクス主義、近代化論、社会科学に由来する数量的アプローチ）。

---

[11] 著者が例として挙げているのは次の研究。Emmanuel Le Roy Ladurie, *Montaillou, village occitan de 1294 à 1324*, Paris, 1975〔エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ（井上幸治・渡辺昌美・波木居純一訳）『モンタイユー：ピレネーの村 1294～1324』上・下、刀水書房、1990-1991 年〕。

・彼らはフランスの歴史家ほど「全体史」には関心がなかった。それよりも彼らがつねに関心を持っていたのは、個に焦点を当てた分析をより一般的なプロセスにどのように結び付けるのかということであった。
・ギンズブルグは、ミクロストリアがグローバルヒストリーに欠かせないツールと見なされ得ると述べているが、それは近年のグローバルヒストリーの興隆に対する応答というわけではなく、むしろミクロストリアが今日のグローバルヒストリーの歴史家によって投げかけられているのと同じ問いに向き合っていることを示している。

〇ミクロヒストリーとグローバルヒストリーの接続への関心の高まり
・「グローバル・ミクロヒストリー」という語も使われるようになっている。この語を最初に使用したのはトニオ・アンドラーデの 2010 年の論文。アンドラーデはモデルや理論に現実の人々を住まわせるために、ミクロヒストリー的、自伝的アプローチを取るように歴史家たちに呼び掛けている[12]。
・それ以来、学者や学会、学術雑誌はこの呼びかけに迅速に応答し、数多くの研究が生み出されてきた。
・こうした研究には次の二つのアプローチが存在する。

①一つの物、場所、個人に焦点を当て、一般的な問いを探求するためのミクロコスモスとしてそれらを利用するタイプ。
②複数の接続された文脈を横断する人間の行動によって生み出された史料を詳細に分析するタイプ。
➡これら二つはグローバルな歴史過程についての研究を一次史料の詳細な分析と結びつけるという志を共有しており、統合的なメタナラティブに代わる重要な方法を提示している。

[12] Tonio Andrade, “A Chinese Farmer, Two African Boys and a Warlord: Toward a Global Microhistory”, *Journal of World History*, 21-4, 2010.

３．ミクロヒストリーの歴史家のように世界を見る（SEEING THE WORLD LIKE A MICROHISTORIAN, pp. 17-22）

〔以下は、本特集号に掲載された他の論文の紹介〕[13]

〇ジャン・ド・ブリーとジョヴァンニ・レヴィの立場

・ド・ブリーはミクロヒストリーとグローバルヒストリーの同盟が何か新しいものをもたらすということに懐疑的。なぜなら、両者とも通時的な分析よりも共時的な分析を優先しているから。むしろ、時間的な変化を説明するのに社会科学の重要性が強調される[14]。

・他方でレヴィは社会科学の理論やモデルが歴史研究の適切な出発点になるという考え方を否定する。むしろ、一次史料を集中的に研究することが重要。ミクロストリアは社会科学の概念によって覆い隠されたあまりにも一般的なビジョンを退ける方法となる。レヴィは新しい一般的な問いを創り出すのに貢献するような歴史研究の実践を好む。

➡本特集号の個別研究はこの二つの視点のあいだに布置される。

〇本特集号のミクロヒストリーとグローバルヒストリーを接続する三つのアプローチ

①「追跡」（following）アプローチ

1979 年にギンズブルグとポーニが提唱した「名前による方法」（複数の文書館を訪れて特定の名前を追跡していく方法）に影響を受けたアプローチ[15]。

➡ギヨーム・カラファ、ジョン・ポール・A・ゴブリアルの方法。

---

[13] 掲載された論文は次のとおり。Jan de Vries, “Playing with Scales: The Global and the Micro, the Macro and the Nano”; Giovanni Levi, “Frail Frontiers?”; Maxine Berg, “Sea Otters and Iron: A Global Microhistory of Value and Exchange at Nootka Sound, 1774–1792”; Romain Bertrand, “Where the Devil Stands: A Microhistorical Reading of Empires as Multiple Moral Worlds (Manila–Mexico, 1577–1580)”; Zoltán Biedermann, “Three Ways of Locating the Global: Microhistorical Challenges in the Study of Early Transcontinental Diplomacy”; Guillaume Calafat, “Jurisdictional Pluralism in a Litigious Sea (1590–1630): Hard Cases, Multi-Sited Trials and Legal Enforcement between North Africa and Italy”; Filippo de Vivo, “Microhistories of Long-Distance Information: Space, Movement and Agency in the Early Modern News”; Sarah Easterby-Smith, “Recalcitrant Seeds: Material Culture and the Global History of Science”; John-Paul A Ghobrial, “Moving Stories and What They Tell Us: Early Modern Mobility Between Microhistory and Global History”; Giorgio Riello, “The World in a Book: The Creation of the Global in Sixteenth-Century European Costume Books”; Jeroen Duindam, “A Plea for Global Comparison: Redefining Dynasty”; Christian G De Vito, “History Without Scale: The Micro-Spatial Perspective”.

[14] Jan de Vries, “Changing the Narrative: The New History That Was and Is To Come”, *Journal of Interdisciplinary History*, 48-3, 2018.

[15] 歴史学分野文献レビュー③を参照。

②「文脈」（contexts）アプローチ

世界規模で展開する歴史的プロセスを再評価する可能性に開けているような特定の文脈を綿密に研究するアプローチ。それによって、ローカルとグローバルの関係、またそうした関係が場所や時間を越えてどう変化するかという問題に取り組む。

➡マキシン・バーグ、フィリッポ・デ・ヴィーヴォ、ジョルジョ・リエッロ、ゾルタン・ビーダーマンの方法。

③「徴候」（clues）アプローチ

グローバルな視点からのみ研究している歴史家には無視されてしまいかねない史料の細部に注目するアプローチ。

➡ロメン・ベルトラン、サラ・イースタービー＝スミスの方法。

○著者が紹介したグローバル・ミクロヒストリーに代わるアプローチ

個人や地域、また短時間的な出来事の独自性を救い出しつつ、ある種のグローバルヒストリーを描き出す方法としての比較史。

➡イェルン・ダインダムの方法。

○クリスチャン・デ・ヴィトの立場

デ・ヴィトの「ミクロ・空間的視点」(micro-spatial perspective)は、ド・ブリーとレヴィに代わる第三の立場を提示している。

➡〔デ・ヴィトの方法については文献レビュー⑫で扱う〕